

国際宇宙ステーションの憂慮

稲宮 健一

一九五七年のスポーツニック・ショックを切っ掛けで米ソ間の宇宙開発競争が顕在化した。一九六一年、ガガーリンの有人飛行、一九六九年、アポロ宇宙船の月面着陸で輝かしい成果が誇示された。しかし、その裏で莫大な国家予算が費され、双方に疲弊をもたらした。そこで、両国間で宇宙空間平和利用のための米ソ覚書が交わされ、一九七二年にアポロ・ソユーズテスト計画が調印された。それにより、一九七五年に両国の宇宙船が同時に打ち上げられ、宇宙上でドッキングし両国の飛行士が一つ宇宙船で過ごす象徴的なイベントがあった。

一九八四年にレーガン大統領の提唱で国際宇宙ステーション(ISS)の構築が提案され、日米欧で分担して製造し宇宙上で組立てた。参加国の宇宙飛行士が無重力の特殊環境下で科学実験などを行った。初期にはスペース・シャトルが宇宙飛行士を運搬した。当時の政治環境に激しい変化が起きて、両陣営の緊張が緩み一九八五年にレーガン・ゴルバチョフとの会談が実現した。一九八九年にベルリンの壁が、そしてソ連邦が崩壊した。ロシア共和国がソ連の宇宙活動を引き継ぎ、一九九三年にISSに参加した。最近のISSへの主要運搬手段としてロシアのバイコヌール基地からソユーズ打ち上げロケットが使われた。現在米国はSpaceX社のFalconロケット、ESAはアリアン・ロケットや、物資の運搬には日本のN-II Aロケットによる宇宙船「こうのとり」が用いられている。

冷戦下であっても、宇宙には夢がある分野なので共同歩調がとられてきた。最近、ロシアはソユーズ・ロケットによる各国の宇宙飛行士の運搬を受け持つISSの主要メンバーになっている。しかるに、今回の暴挙で、ロシアの従来の通りの参画が難しくなるのではないかと心配する。平和裡に一緒に宇宙活動できるまでに長い年月がかかった。しかし、政治の猜疑心が平和なムードを一瞬に壊す。宇宙に、日米欧、ロシア、中国の政治の争いを持ち込まないで欲しい。